

乗本祐慈さん追悼文集

乗本祐慈さんを悼む～岡山天体物理観測所でモノづくりを 支えてくれてありがとう～

野口 猛 (元 国立天文台)

岡山天体物理観測所の創設期を共にした乗本祐慈さんの突然の訃報を4月15日に知り、ただただ驚き、そして淋しい思いをしております。

鴨方町役場の片隅にあった仮事務所へ初出勤し、東京から清水実さんが着任された1960年3月初め、すでに赴任されていた石田五郎さんから、暫くはこの4人で望遠鏡建設現場をよく観察して、望遠鏡の運用期に入ると故障もするであろうから、その日に備えて望遠鏡やドームの構造をよく理解するようにとの訓辞を受け、早速山頂の建設現場に駆けつけた。その日の昼休みに、面接試験で天文台長の名を問われたが答えられなかったことを思い出して、乗本さんに尋ねたら、現台長は宮地政司、前台長は萩原雄祐であると即座に答えが返ってきたので、勉強していることに感心した。

74インチ(188 cm)望遠鏡のドームが完成して間もなく、末元善三郎さんがリーダーとなり、石田さん、清水さんとわれわれ二人が参加して極軸の据付位置を決めるための初観測を経験した。天測を行った夜は快晴に恵まれて、末元さんたちが南ピアに設置したセオドライト(視準望遠鏡)を北極星に向けてのぞき、われわれ二人は北ピアに登って命令されるままにターゲットを照明した。この結果をもとに南北の軸受けが設置されたのである。やがて、望遠鏡の部品群が玉島港に到着して、パトカーの先導でつづら折りの山道を運搬されて、ドーム横に設置された保税倉庫で通関手続きを済ませるとダイナミックな組み立てが始



2000年の岡山観測所40周年記念式での記念撮影から。

まった。われわれ二人もようやく慣れて、写真を撮ったり、組み立ての様子をノートしたりでとても充実した日々を送った。余談であるが、この時の保税倉庫が移築されて、岡山におけるモノづくりのメッカともなる工場になったのである。

その秋に開所式が行われ、初代所長の大沢清輝さんらの地道な試験観測が始まる中で、清水さんが東京天文台三鷹本部への出張土産として分光器の残骸部品をわれわれ二人に見せながら36インチ(91 cm)望遠鏡用の分光器製作の発案があった。設計前に部品を配置した光学実験が清水さんの指導のもとに行われ、製図の心得が少しある筆者が設計図を引き、金属部品の多くは乗本さんが工場に入り浸って作り、筆者も少しだけ手伝ってツァイス(Zeiss)の頭文字をとったZ分光器は出来上がった。このZ分光器を駆使して標準星の

スペクトルを撮りためて、Yamashita, Nariai, Norimoto, “An Atlas of Representative Stellar Spectra” (1977)として出版の運びとなった。

その頃の昼休みは、晴れていれば決まって石田さんがノックするソフトボールの球を清水さんとわれわれ二人が追いかけて遊んでいた。写真2は、ノックの後で36インチ望遠鏡ドームの階段に並んだところを石田さんが撮ってくださったものである。2年ほど経つと所員も増えて、石田さんや清水さんが参加してやっと9人そろうという控え選手もいないチームであったが、鴨方町と矢掛町の社会人職域野球大会に出場し、絶えず優勝争いに食い込むクレバー野球で名をはせた。渡辺悦二さんや米沢誠介さんがピッチャーとして頑張り、乗本さんはキャッチャーで不動の4番打者として活躍された。

乗本さんが奥様を迎えられて新婚間もない頃、矢掛町内の橋が完成したそうで、その記念行事として、ご祖父母、ご両親、若夫婦の「3代夫婦の渡り初め」に招待されたと言って、少し照れながらも喜ばれていたことを思い出す。

イギリスのグラブパーソンズ製の74インチ望遠鏡はよく故障した。故障したからと言っておいそれと修理を頼むこともできず、インターネットのない時代で問合せもままならなかった。また、東京から遠く離れていたことも幸いして、われわれ自身で故障を直す以外に方法はなく、清水さんを中心とする現地スタッフが「群盲象をなでる」がごとく、自力更生することで観測を中断させることはなかった。ここで習得された技術の蓄積がZ分光器に端を発する機器開発へと継承され、岡山のモノづくりの根幹になっていったのだと思っている。本格的な機器開発が始まったばかりの時期に筆者は木曾観測所へ移動したので、その後の乗本さんのモノづくりについて直接知る機会はなくなったが、岡山ユーザーの中にはお世話になった多くの方々がいらっしゃるはずだ。また当時は、写真乾板全盛の時代で、コダックから輸入し



写真1 74インチ望遠鏡待機室にて、前方が乗本さん、後方が筆者。



写真2 36インチ望遠鏡ドームの階段で、左から乗本さん、清水さん、筆者。

た貴重な天体用写真乾板の管理を几帳面な乗本さんが長年勤められた。

次期大型光学赤外線望遠鏡計画が議論されるなか、世界の次世代望遠鏡計画を調査することになり、古在由秀さんが代表である東大創立100年記念事業の資金援助を受けて、1981年に磯部瑋三

さん馬場直志さんとツーソンのキットピーク天文台を訪れた折に、乗本さんと大島紀夫さんが自費で途中から参加され、狭いアパートで寝食を共にし、知り得たアメリカの次世代大型光学赤外線望遠鏡計画に触発されて日本の計画がいかにあるべきかを熱く語り合ったことが思い出される。乗本さんは、この時に意気投合した馬場さんと帰国後もスペックル装置の開発を通して長く親交を温め合った。

やがて、小平桂一さんが進めるすばる望遠鏡の計画が本格化し、家正則さん、田中済さんらとともに主鏡面能動支持のモデル実験が行われることになって、シャック・ハルトマン装置の検出器として、川上肇さんと乗本さんが開発されたCCDを使わせていただいた。この実験は、すばる望遠鏡の鏡面制御が実現可能であることを証明し、計画推進に携わった者の一人として大きな自信になった。

乗本さんが退職された2002年の秋に、JICAのシニア海外ボランティアでパラグアイに滞在したことの土産話をさせていただくために、矢掛のご自宅を妻とともに訪ねる機会があり、退職後アスパラガスの栽培に精を出しているお話を伺った。また、丹精込めて作られた新米を拙宅まで送っていただき、美味しく食べさせていただいた。その折、軽い脳梗塞を克服して農作業を楽しんでいるとお聞きしたが、今回はかなり重篤であり、1年間の闘病を送られたが回復には至らなかったと、お悔やみの電話の向こうで奥様がおっしゃった。

最後になるが、岡山天体物観測所で創設期を共に過ごした仲間として、天文観測のためのモノづくりを支え続けてこられた乗本祐慈さんに「ありがとう」と感謝し、心からご冥福をお祈りしたい。

乗本さんを悼む

馬場直志 (北海道大学名誉教授)

乗本祐慈さんの訃報を真っ先に私に知らせてくれたのは、乗本さんと一緒にCCDの先駆的开发に携わっていた川上肇さんでした。岡山の柳澤顕史さん、三鷹の桜井隆さんからもお知らせいただきました。

乗本さんと最初に会ったのは私が千葉大の助手であった1981年に岡山の望遠鏡を見学に行ったときでした。そして、それ以後の深い付き合いとなった切っ掛けは、同年の12月から米国アリゾナ州ツーソンでの一軒家での共同生活からでした。「超大型天体望遠鏡用新型鏡の研究」(代表者、古在由秀)ということで東京天文台の磯部琇三さん、野口猛さんと私がキットピーク天文台に先発隊で行っていた折に、乗本さんと堂平観測所の大島紀夫さんが合流してきたのです。

岡山でのスペックル観測に三浦則明さん(現、北見工大)や堂平の野口本和さんらと一緒に行った折にはいつも乗本さんが面倒をみてくれました。メキシコのサンペドロ天文台の2.1 m望遠鏡によるスペックル観測にも毎回のよう同行していただきました。サンペドロ天文台に行くときはエンセナーダにある天文学研究所(メキシコ国立自治大学)から出発するのですが、その図書室に行った折、「ここにはアトラス¹⁾があるはずじゃ」と言って司書の人が見つけると、この著者がここにいる乗本さんと知りびっくりしていたことが思い出されます。乗本さんには岡山のスペックル撮像分光装置のほかに、すばる望遠鏡用の可視試験観測装置も製作していただき、今思い返しても乗本さんにはたいへんお世話になったと痛感



写真1 すばる望遠鏡における可視試験観測装置 (VTOS) の立ち上げ時のスナップ。真ん中が乗本さん、右から2番目が筆者、左端が三浦さんと北大の院生とともに。



写真2 1988年、メキシコ国立自治大学天文学研究所のチェリー夫妻を岡山天体物理観測所に迎えて。左から順に、沖田喜一さん、牧田貢さん、レティシアさん、筆者、前原英夫さん、川上肇さん、アラン・チェリーさん、小矢野久さん、野口本和さん、乗本さん。

しています。

2010年の岡山天体物理観測所50周年記念式典の際に、久しぶりに飲み語り明かそうと同じホテルを予約していたのですが、当時工学部長をしていた私のほうに急な用務が生じ岡山に行けなくなってしまいました。乗本さんは式典参列後にホテルに泊まることなく帰られたと聞きたいへん申し訳ない気持ちで一杯でした。今となっては、これが元氣な乗本さんと語り合えた最後の機会だったはずで悔やまれて仕方ありません。1年前に脳梗塞を発症して以来、半身不随の状態でご家族の懸命な介護にもかかわらず肺炎で亡くなられまし

た。昨年4月にお見舞いに伺った際には動かせるほうの手で固く握り返してくれ、頑強な体の持ち主でもあったのでリハビリで必ずや回復されると思っておりました。観測の際トラブルが起きると『父ちゃんに任せろ!』と言ってやってくれた乗本さんがもう居ないという喪失感は甚大です。合掌。

参考文献

- 1) Yamashita Y., Nariai K., Norimoto Y., 1977, An Atlas of Representative Stellar Spectra (University of Tokyo Press, Tokyo)

乗本祐慈さんを送る

吉田道利 (広島大学)

乗本さんに初めて会ったのは、まだ私が学部生のときであった。初めて行った岡山観測所の廊下で、観測が終わった帰り際に彼とすれ違ったのである。その時彼は、初対面の私に向かって、「また来なさい」という意味のことを言った。彼の流暢な岡山弁を、私は再現することはできない。だが、ひよっこだった私にその言葉は確かに伝わ

り、私は心に大きな力がわき上がるのを感じた。彼の言葉に気取りはなく、しかし親しみに満ちていた。そこには、その後長く付き合うこととなる乗本さんという人の本質がすべて詰まっていたのだと、今にして思う。

大学院生になって再び岡山を訪れたとき、乗本さんは、川上肇さんが主として進められていた

CCDカメラの立ち上げに献身的に協力されていた。当時（1987年）、日本ではCCDはようやく導入が始まった頃であり、川上さんは岡山でその先陣を切って実験を進められていた。私は初めてCCDカメラを取り付けた分光器（新カセグレン分光器と呼ばれていた）で銀河を分光する様子を見学し、得られたデータの鮮やかさに驚いていた。清水康広さんお手製の制御ソフトも印象的だった。乗本さんは川上さんと一心同体、わが国でのCCD黎明期に懸命にその立ち上げに尽力されていた。そこには、技術者として、研究者を信頼し、また研究者から信頼されて新たな地平を切り拓くという意気込みが伺えた。

時が流れ、私は運よく岡山観測所に拾われることとなった。乗本さん、渡辺悦二さんをはじめとする岡山の技術陣は、若造の私と、まるで年齢差を感じさせないフランクな付き合いをしてくれた。乗本さんからすれば、私は息子と言ってもいい歳で、実際には付き合いにくかったかもしれない。しかし、彼はそんなことはおくびにも出さず、対等の同僚として接してくれた。昼休みのテニスにも誘ってもらった。乗本さんはパワーヒッターで、彼の放つ鋭いショットに、テニス初心者の私は手も出せないことが多かった。コートを走らされて汗みずくになっている私の横を、涼しい顔で「お疲れさん」と通り過ぎていく彼の姿もよく覚えている。

三鷹ですばるのために何年か働いた後、前原英夫さんの後をついで岡山の所長を仰せつかったときも、乗本さんは以前と変わらぬ態度で私に接してくれた。それがどれほどの大きな支えとなったことか。彼はよくこう言っていた。

「形あるものはいつかは壊れる。じゃけん、壊れる前によく見て手当せんといけん。」

そして、188 cm望遠鏡のドームを毎日見回り、まるでわが子のようにその面倒を見てくれた。乗本さんの在職中、私はドーム周りの心配をすることはなかった。それだけに、乗本さんの退職に当たっては、私の中にはドーム維持に関する大きな不安が膨れ上がっていた。だが、退職パーティーの時に彼は言ってくれた。

「いつも麓から見とるけん。」

私の心から重荷が降りるようだった。思えば、乗本さんの家は観測所ドームからよく見える。そこから見守られているということに、私は大きな安堵を覚えたのである。彼は実直で飾らない人だったが、こうしたところに優しさや懐の深さを見せてくれた。それは、私が初めて彼と観測所で出会ったあの頃と少しも変わらないものだった。

乗本さんの訃報は、私にとってあまりに急なことだった。しかし聞けば、すでに病床につくこと長きにわたっていたという。ここしばらくの彼の動静を知らず、安穩としていた自分に忸怩たる思いを禁じえない。何もできることはなかったが、とにかく最後のお別れをするために、亡くなった日の夜に乗本さんのお家に伺った。もはや動くことのないそのお顔は穏やかで、苦しみのない様子に心が軽くなる思いがした。ご遺族の方と少しお話をし、お家を出た。よく晴れた星空を背景に、188 cm望遠鏡のドームがよく見えた。

乗本祐慈さん。たいへんお世話になりました。観測所黎明期より長年にわたり、岡山天体物理観測所を支えてくださったこと、まことにご苦労さまでした。そして、退職後も観測所のことを再三気にかけていただいたこと、ありがとうございます。

お冥福をお祈りします。さようなら。

乗本さんとの思い出

栗野諭美 (岡山天文博物館)

乗本さんと初めてお会いしたのは、大阪教育大学修士に進学した春。可視光スペクトルを扱ったわかりやすい解説書を作ろう、ということで、「恒星スペクトルの教育利用・スペクトルカタログ制作（後の『宇宙スペクトル博物館』）」というテーマのもと、カタログの素材となる恒星スペクトル観測のために岡山観測所に通うことになったのが縁でした。メイン観測装置は91 cm反射望遠鏡のZ分光器（プリズム分光器）。その観測かつ指導をしてくださったのが乗本さんです。

はじめてお会いしたとき、なんと乗本さんは全く目をあわせてくれず、ほとんどしゃべってもくれませんでした。けれどそれは、超恥ずかしがりやで照れ屋だからだったから。すぐに、本当は愛情あふれた細やかな心の持ち主だということに気づくこととなります。

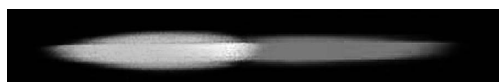


図1 悪戦苦闘の末、撮影に成功した蛍のスペクトル。連続光で緑と赤が強く出ている。



写真1 元素のスペクトル撮影のため元素の放電管を分光器に取り付ける準備をする乗本さん。こちらも試行錯誤の繰り返しだった。

Z分光でネガフィルムを使っのスペクトル観測は、見るもの触れるものすべてが初めてのことばかりで、びっくりの連続でした。写真の撮影では、暗い星だと実に数時間ずっとシャッターを開放したまま追い続ける必要があるため、一晩で一天体しか観測できないということもありました。またスペクトルに幅をつけるため、スリット上を一定の速さで動かす作業も欠かせません。そうなると、食事どころかトイレに行く時間もままなら



写真2 乗本さん（左）と私（右）。188 cm望遠鏡ドームの外通路にて。



写真3 お気に入りの帽子をかぶり、私に田植えを指導する乗本さん。

ず、気を抜くことができずにこれはたいへんなどころにきてしまった！ と思ったものです。

さらに翌日は暗室にこもってフィルム現像です。瞬時にコンピュータで解析できる今に比べて、すべてがとても手間がかかる作業でした。けれど写真が浮かび上がってきたときの喜び、そして写真に込められた一つひとつの思いを再確認できるこの瞬間は、とても貴重な味のある経験でした。なによりこれらすべての作業は、乗本さんの長年の観測経験と勘が頼り。仕事に厳しく妥協は許さない、そんな職人気質な姿勢を通して、たくさんのことを学ばせていただきました。

観測以外での楽しい思い出もたくさんあります。観測所では基本的に昼間は自由行動ですが、慣れない場所で時間をもて余しているのではないかと、いつも気にかけてくださいました。週末には、忙しい農作業の合間に軽トラで(!)ドライブに連れて行ってくださったり、またご自宅の田植え作業のお手伝い(というより邪魔しに?)行かせていただいたことも。へっぴり腰でトラクターを運転する姿に「まだまだじゃのう～」と笑われたものでした。

観測所のみなさんと楽しくおしゃべりしていると、すねてしまうこともありました(笑)。そのままぶいっと姿を消ししばらく姿を見かけないなあと思っていると、夕方、ご自宅から収穫したての野菜や果物を両手いっぱいにもって登場。乗本家の野菜や果物は最高のご馳走です。わずかな観測の合間、並んで91 cmドームの階段に座り、沈みゆく天の川を見ながらスイカにかぶりつき、すぐに仲直りとなりました。乗本さんと星空を眺め

たあの時間は最高に贅沢な時間で、今も私の心に焼きついています。

大学の研究室に本物の蛍が届いたこともありました。『宇宙スペクトル博物館』の自然界の光を紹介するページで、本物の蛍のスペクトルも紹介しようということになり、乗本さんが近所の蛍を捕まえて送ってくださったのです。悪戦苦闘の撮影の様子(スリットの上に蛍をセロファンテープで固定したものの、なかなか光ってくれないからどうしたものか…etc.)が書かれた手紙とともに、かわいい虫かごに入ってはるばる岡山から大阪までやってきた蛍には、指導教官の定金先生も私もびっくり! 定金先生の「ホントに送ってきたぜ!」の言葉は忘れられません。でもおかげで、初夏のひとつときを楽しませてもらったのでした。

縁あって観測所と同じ敷地内にある岡山天文博物館へ勤めることになったときも、乗本さんは恥ずかしそうな顔で、でもとてもうれしそうに迎えてくれました。退職後も「なんかいいことはないかの～」とたびたび博物館へやってきては、何も変わらない様子を見ると「ちばけどんなあ(ふざけるんじゃないよ)。まあ、また楽しく観測しようや。」と笑って帰っていくのでした。

ずっと「観測してた頃は楽しかったなあ。まだまだやりたいことがいっぱいあるぞ。」と言っていた乗本さん。きっと今も空の上から、私たちを眺めていることでしょう。「相変わらずちばけどんなあ」といわれないように、乗本さんから受け継いだたくさんのことを大事に残していきますので、これからも見守っててくださいね。